路地裏の親子

高田龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
路地裏の親子

【Ｎコード】
Ｎ９７３６Ｄ

【作者名】
高田龍

【あらすじ】
偶然、立ち寄った夜更けの商店街。狭い路地で出会った親子。時の向こう側に忘れて来た父親への思い。不思議な一瞬の再会。

（前書き）

私の、まったく私的な小説です。
ける物かも判りませんが。
…。

広く皆さんに読んで戴
暇潰しにでもなれば…

国道沿いの歩道をしばらく歩いてから、駅へ続く商店街の在る通りへ入っていく。

凍てつく二月の夜風は頬に痛い。

午後１１時をだいぶ過ぎている為か、シャッターを降ろした店が殆どで、アーケードに人影は少ない。

終電近くの電車から降りて来たらしい人の群が駅の方からこちらへ向かって来る。

その集団が酒の匂いを残して通り過ぎると、辺りは静けさを増した。

私は、やっと人がすれ違える程度の路地の前に来た。

街灯も無い路地は漆を流したように暗く、先がどうなっているのか判らない。

私は駅に向かっていた。

最終電車なら間に合う筈だと、思いがけず時間をくった訪問先から急ぎ足でここまで来たのだが、何故か、その路地へ吸い込まれるように入って行った。

路地は緩やかに右に曲がっている。

暗さも手伝い、そのせいで先が見えなかったのだろう。

数十メートル行った所で振り返ると商店街の灯りは見えなくなっていた。

その理由が判っているとは言っても、暗闇に取り残されてしまった感じは気持ちのいいものでは無い。

それでも私は引き返さなかった。

何故か引き返したくなかった。

もう時間の事も気にならなくなっていた。

寒さも感じない。

暗闇の向こうに灯りが見えた。

その明るさは淡く、暖かく、心に染み込んでくる…。

その灯りの中から、人影が二つ抜け出て来た。

何処かで会った事の有るような二人。

小学校に上がったばかりかと思える少年と四十代の男性、親子なのだろう。

少年の笑い声が闇の中に流れる。

『お父ちゃん…』

少年の声、やはり親子だ。

父親が息子の名を呼ぶ。

なんと呼んだのかは聞き取れなかったが、自分が呼ばれたような、そんな気がした。

父親の笑顔に息子への愛情が溢れる。

懐かしい風景。

少年はひっきりなしに父親に話しかけ、父親は笑顔で応える。

二人は私とすれ違う。

少年は私の存在にまったく気付かなかったが、父親はすれ違う時に私に視線を向けた。

息子を見る眼と同じ暖かい眼差しだった。

艶のある黒い髪をオールバックに撫でつけ、鼻筋の通った整った顔。

太い首、盛り上がった肩、そのがっしりとした体に真っ白なランニングシャツ、上に淡いグレーに白の格子縞の開襟シャツを羽織り息子の手を曳いている。

（何で、夏の格好してるの？）

私は歩みを進め、銭湯の帰りらしい親子は心地よい石鹸の香りを残して遠ざかる。

少年の笑い声も遠ざかる。

ふと歩みを止めて親子の方を振り返ると、暗闇に溶け込んでしまいそうな辺りで、二人は立ち止まっていて、息子は父親を見上げている。

父親は…。

私を見ていた。

心暖まる笑顔で……。

気が付くと私の頬を泪がつたい、私は訳もなくその場に立ち尽くし泣き続けていた。

暗闇の中の路地裏の風景は涙で歪んで、その歪んだ風景の中にぼんやりと、所々塗りの剥げた銭湯の看板が…『熱海湯』と書いてあった。

結局、最終の電車には間に合わなかったが、私はあの不思議な感動の体験がむしろ嬉しく、そっと心の奥の引き出しに仕舞った。

月日は慌ただしく流れて行く。

桜の開花が近付いていた。

私の息子が卒業して、大学近くのアパートを引き払い家に戻って来た。

息子と一緒に四年分の荷物も帰って来た。

さほど広くもない我が家の玄関と云い、廊下と云い、所狭しと息子の荷物で埋め尽くされてしまった。

家族総出で片づけ始めたのだが、スペースを作ろうと押し入れの中の古い段ボール箱を整理していた時だった、色褪せた写真の何枚かが床に滑り落ち、そのなかの一枚に私の眼は釘付けになった。

セピアに変色してしまったそのモノクロ写真の中で私の父が白い歯を見せて笑っている。

その横で少しはにかんだ様な小学生の私が写っている。

オールバックに髪を撫でつけ、格子縞の開襟シャツを羽織り、私の小さな肩に腕を回し、『熱海湯』と書かれた暖簾を背にして父は立っている。

あの夜と同じように…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9736d/

路地裏の親子

2010年10月28日08時23分発行